2022年（令和4年）8月10日 発行　流鉄流山線新聞

100年以上走り続けるローカル鉄道 安全・親切 流鉄流山線

千葉県北西部の松戸市と流山市を結ぶ全長たった5.7キロの「流鉄流山線」は、東京から一番近いローカル鉄道。駅数は6つ、乗車時間約12分の単線ワンマン列車。大正時代に地元の人々の出資で名産の白みりんを運ぶ町民鉄道として誕生し、現在は通勤、通学など毎日の暮らしを支え、100年以上走り続けている。

西武鉄道の車両をゆずり受け、「あかぎ」「なの花」「若葉」「さくら」「流星」の愛称のカラフルな一編成2両の電車が街の中を走っている。

松戸市立東松戸小学校 5年 小澤 葵太

安全・親切 流鉄 小金城趾駅 〈列車交換運転の巻〉

① 駅ホームに駅員はいない

（横から見た図）

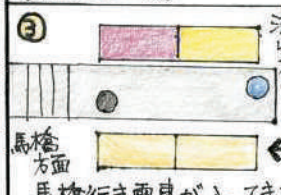
ホームの前、後には大きなミラーがある。改札は階段の上にあり、駅員が1人で守っている。

② 電車 → 流山方面

（上から見た図）

ホームに流山行き電車が入ってきてドアが開く。運転手がホームに出て、安全確認をしている。

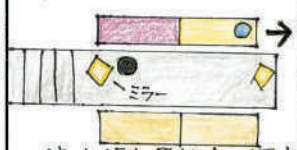
③ 流山方面



馬橋行き電車が入ってきてドアが開く。運転手がホームに出てくる。

④ 馬橋行き運転手が階段上にいる駅員と乗りおくれている人がいないか、確認する。

⑤ 馬橋行き運転手が発車ベルをならす。



流山行き運転手が電車にもどり、ドアをしめて運転席へ。馬橋行き運転手と安全確認をして出発。

⑥

馬橋行き運転手は安全確認をしてドアをしめて運転席へ。安全確認をして出発。

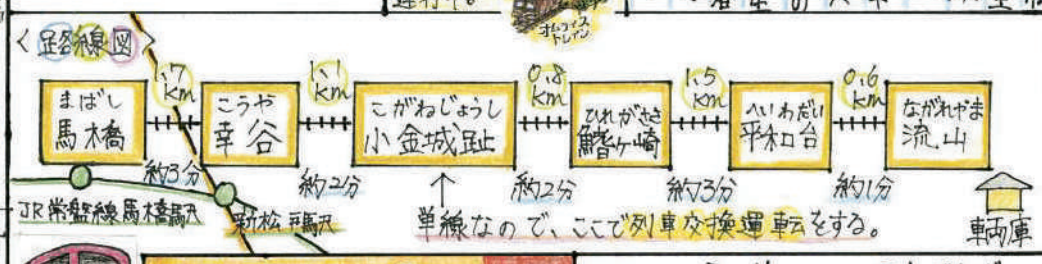
〈流鉄の歴史〉

1913（大正2）年	流山軽便鉄道株式会社設立
16（大正5）年	営業開始
49（昭和24）年	電化
67（昭和42）年	小金城趾駅で列車交換運転開始
2008（平成20）年	流鉄株式会社に
09（平成21）年	ワンマン運転開始
2016（平成28）年	開業100周年

〈赤と黄色のオムライス電車誕生〉

昨年11月の車両故障をきっかけに「なの花」と「あかぎ」を1両ずつ組んで運行中。

〈路線図〉



今年の夏も暑い レールも悲鳴をあげている?!

8月2日(火)に「レールの温度が規定値に達したとして流鉄流山線（以下流鉄）全線で運転を見合わせている。」と、ニュースが流れました。2018年にレールの温度の規定値を設定して以来、初めて。実際にどうやってレールの温度を測るのか、点検の仕方を流鉄馬橋駅のふじやさんに教えてもらいました。

レールに直接温度計をつけて測っていたとは！おどろきでした。レール点検は昼間に人が歩いて目で見て確認して、レール交換は電車が走っていない夜間に行うそうです。他社の鉄道で使うマルチプルタイタンパーなどの機械は全長5.7kmで距離も短いし、置いておく場所もないし、お金もかかるから、流鉄にはない！人の力で頑張っていることを知って、流鉄ってすごいな!!と思いました。

ぼく

「この前、レールの温度が上がって電車を止めてレールの点検をしたって、ニュースで知りました。」

しぶやさん

「うちはレールの温度が63℃までって決まりがあって、あの日は64℃になっちゃったから、5.7kmを保守担当の人が歩いて目で見て確認して、問題なかったから運行再開したよ。レールの温度は、あんな感じのよくある温度計を直接レールにつけて測るんだよ（馬橋駅ホームの柱についている温度計を見せてくれた）。」

「気温の変化に対応するためにレールに工夫はありますか。」

「レールとレールの間に遊間（ゆうかん）っていうすき間を作ってあるから、暑い時はレールはのびて、寒い時はちぢむけれど対応できるよ。」

〈遊間（ゆうかん）〉

四季のある日本では、寒暖による伸縮を考りょして遊間を設置している。

編集後記

どの駅でも運転手と駅員が協力して乗りおくれている人がいないか確認していた。お客さん想いの流鉄に感動した。自動改札機はないし、便利なものはそろっていないけれど、人の力で安全を守っている。これからも走り続けてほしい。

ぼくの質問にわかりやすく答えてくれた流鉄馬橋駅のしぶやさん、ありがとうございました。流鉄が大好きになりました。

流鉄いろいろ

ゆれる　リーンと大きなベルの音がなって、発車。席に座るとガタンゴトンの音に合わせておしりがうくほどゆれる。初めはびっくり。慣れると楽しい。

ワンマン　車掌はいない。ドアの開閉は運転手がする。馬橋ー流山間を何往復も運転していた。大変そうだけど、やってみたい。

汽笛　安全運行のため、同じ所を踏み切り手前でならして知らせている。